

春期海外語学研修報告

著者	臼山 利信, 松下 聖, 二ノ宮 崇司
雑誌名	外国語教育論集
号	41
ページ	85-86
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155079

春期海外語学研修報告

2017年度カザフスタン春期ロシア語研修について

白山利信 (CEGLOC)・松下聖 (CEGLOC)・
二ノ宮崇司 (筑波大学アルマトイオフィス)

中央アジアのカザフスタン共和国でのロシア語研修は、今年度で4回目を迎えた。本科目はCEGLOC開設科目であるが、初回～3回目までは、地域研究イノベーション学位プログラム(ASIP)が主たる運営を担い、今回は大学の世界展開力強化事業(ロシア)「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」が運営を行うなど、全学的なグローバル人材育成プログラムとも連動した科目となっている。

カザフスタン共和国は1991年にソヴィエト連邦から独立した後、人口の過半数を占めるカザフ民族の言語であるカザフ語を国家語とすると同時に、ロシア語も公用語とされ、日常生活からビジネス、教育の言語としてロシア語が広く普及している。

今回の研修は、本学の協定大学であるカザフ国立大学を受入先機関として、ロシア語およびカザフ語の習得と異文化理解を目的として実施した。カザフ国立大学内には本学アルマトイオフィスを設置しており、二ノ宮崇司(カザフ国立大学日本語招聘教授)がコーディネーターを務めている。本研修も、二ノ宮教授およびカザフ国立大学東洋学部の関係教員が全面的な支援を行い実現したものである。

研修には本学学生4名が参加した。いずれもロシア語履修経験者であり、ロシア語運用能力の向上を第一目的として参加した。ロシア語以外にも、テュルク系世界の文化や自然環境への興味、生物学的な興味も持ち、研修に参加した者もいた。

カザフ国立大学の準備学部で提供されているロシア語コースは入門レベルから中上級レベルまで用意されている。クラスは多数用意されており、一度配属されたクラスのレベルと自分の語学レベルが合っていない場合でも、クラスの変更が可能である。授業内容は、ロシア語の文法・読解・会話が大半であり、補足的にカザフスタンの歴史と文化、カザフ語の授業が組み込まれる。セメスターの途中から入ってきた研修生達はプレースメントテスト(会話でのやり取り)を受け、それぞれの適切なレベルに振り分けられた。研修生4名の内、比較文化学類の男子学生は中級レベル、残り3名の学生は初級レベルに振り分けられた。中級レベルであれば、ロシア語のみで授業が実施されるが、入門、初級レベルの場合、英語が補助的に用いられる。

準備学部でのロシア語研修以外に、アルマトイオフィスはカザフスタン一般についての授業を日本語で提供した。2017年度の研修では、カザフ語の言語的特徴を

Shadayeva Madina 上級講師が、カザフスタンの環境問題を Yerlan Akhapov 准教授が担当し、カザフスタンの伝統文化の紹介ということで、Borankulova Samal 上級講師がカザフスタン国立中央博物館を案内した。またエクスカージョンとして郊外での馬上体験、カザフ人の家庭の文化を知ってもらうという目的でホームステイを企画し、さらに日本センターで日本語を勉強している学生との交流の場を設けた。研修のまとめとして、国際学生フォーラム（日本人の学生は可能な限りロシア語で、カザフ人の学生は日本語で発表する）を毎年開催しているが、2017年度のテーマは異文化理解、ステレオタイプであった。

また本研修では、筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）により10万円の渡航費支援ができた。

研修を終えて、参加学生は「さらにロシア語を勉強したい」、「留学をしたい」、「他のロシア語圏諸国へも行ってみたい」など、語学や海外留学に対するモチベーションが一気に高まったようである。実際に本研修参加者4名うち、2名はロシア、キルギスへの交換留学が決まっている。今後もカザフスタンでの語学研修を継続し、こうした意欲ある学生を多く生み出していきたい。



研修中に行われた第4回国際学生フォーラムの様子



日本センターでの研修生の歓迎セレモニーの様子